
据え膳！？

三端ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

据え膳！？

【Nコード】

N9596Y

【作者名】

三端ジュン

【あらすじ】

埋田が奇妙な肉屋で購入したものは、食用として卸された人間の子どもだった。

ランと名付けた少年は自分を食べて貰わんがために、ありとあらゆる手を尽くす。戸惑う埋田と不愉快な仲間たち、地縛霊の憑島と口リコンの同僚、哀沢をも巻き込んだ世にも奇妙なクリスマスマスの日々が幕を開ける。（個人サイトで連載しているものです）

ヘル・ミート

12月に入ってから、いやそうでなくても。やたらと目につく、まだ人出の多い街の中を憚ることなくいちやつく連中に、埋田は一人心中で毒づいていた。

「ちくしょう……」

27歳独身喪男の埋田にとってそれは、ある意味で犯罪にも等しかった。視覚的な暴力行為だった。

「あー、マジで、地球爆発しねーかな」

ぼそ、と小声で呟いてみる。疲れているのだ。

年末に向けてじわりじわりと仕事量が増している。取りあえず今日の所は、職場で未処理の伝票の山に風邪気味なのを理由に見切りをつけて、どうにか定時に逃げ出すことには成功した。

偶には元気になれそうな御馳走でも食べてやろうかと足を延ばして専門店街までやってきたところだった。年末恒例のどこもかしこも工事中祭りのおかげで大幅に迂回させられた分のイライラも疲れに上乗せされていた。

何が食べたいかを考えて、埋田はまず一番に大きな塊の肉を連想した。御馳走とは言えばそれが目に浮かんた。その古めかしい発想は如何なものかとは思ったが、埋田は由緒正しい昭和の生まれなのだ。そうして埋田の家計には、店で食べられる程の余裕は無かった。ぼんやりと肉屋を探し歩いて、埋田は足を止めた。商店街の奥、一つだけ他所とは異なる雰囲気を感じ出している建物があった。

「なんだここ、こんなあったか？まあ、この辺りより知らんけどさ……」

そこは肉屋であるらしかった。ガラス張りの入り口の奥、そこには確かに肉の並んだショーケースらしきものがうかがえた。ただ、その外装はどこか外国にある古城を模していて、見るからに怪しかった。児童書の挿絵なんかにあるような、悪い魔女の住処と言われ

ればそのとおりの見た目だった。

入口に掲げられた看板にはアルファベットで店名が書き込まれていた。

『高級食肉専門店・HELLMEAT』

その下には二足歩行をしている羊のイメージキャラクターが、両手にそれぞれナイフとフォークを握りしめ、その頭に深々と刺さった包丁により激しく流血させた状態で客を出迎えるように微笑んでいた。

「……趣味悪っ」

埋田はちよつとどうしようかと迷ったが、この店に入ってみることにした。

自動ドアが開き、一步踏み入れた店内は埋田の想像のはるか斜め上を行っていた。一面赤黒い壁に囲まれ、内装もまるで魔女の館そのものだった。照明は真つ黒のシャンデリアで、蝋燭によつてぼんやりと照らし出されていた。そんな中を怪しげなBGMが流されている。埋田にはわからないが、多分クラシックとかいう類の音楽なのだろう。よくあるキャッチーな店のテーマソングのような、でたらめに明るいものではないというのだけは分かった。

埋田の正面には、この場には間違いに明るく蛍光灯により照らされた、外からも見えたあのショーケースがある。中は4段に区切られ、銀色のトレーにそれぞれ切り分けられた肉の塊が並べられていた。これが無ければここが肉屋だとは信じられなかっただろう。

怪しいのは店の内装だけで、まともに肉を販売しているらしかった。埋田はほつと息を吐いた。

「あら、いらつしゃい」

店の奥からぬつと姿を現した人物がそう声を掛けてきた。不自然に作ったような甲高い声だった。どうやら店主のようだ。まるまると肥った体格のいい女だった。

埋田は女を思わず凝視して見た。どう見ても肌色をしたドラム缶に黒い布きれを巻きつけたもののようになか見えなかったからだ。

「お兄さん、注文はお決まりなのかい？まだだったら、あちしが色々おすすめとか教えたいわよ？」

「……い、いや、まだその、まだ考えてる途中なんぞっ」

「あら、そ。いーわいーわ、ゆっくり見てって頂戴」

女はニコ、と笑って言った。その顔はどこか愛嬌があって可愛らしくもある類だった。……この場合の可愛い、は純粋な言葉の意味とは少しばかり違ってゐるのだが。

リーン、リーン、とベルの音が響いた。それは壁に据え付けられた、これまたアンティークのような電話機の鳴らす音だった。のっそのつそと女が近寄り、受話器を取り上げた。

女が客らしい相手と何事か話している。埋田は改めて店の商品を見て回った。看板通りに、高級な肉を取り扱う店のような店だった。グラム数辺りの値段がスーパーのものよりも、なるほど大分値が張っているように見える。

正面のショーケースの横に、加工肉の並んだケースがあった。ハムやソーセージだけでも驚くほどの種類が取り揃えられていた。どれもこれも美味しそうだ。骨付きのままローストされた肉の塊もあった。かなり大きなものだ。埋田には何の肉なのかわからなかった。高級な肉だけあって、日本ではめったに見掛けないものなのかもしれないな、と埋田は思った。

とりあえず財布の中身と相談して、なにを買おうかと考えた。牛か、豚か、それとも地鶏なんかはどうだろう。色々と考えながら更にその隣のショーケースを見た。

埋田は目を見開いた。それから瞬きをして両目をこすり、もう一度ケースの中を覗き込んだ。ショーケースの中には、まだ小さな人間の男の子が眠っていた。

「何だつて！」

突然張り上げられた女の声にびっくりして埋田はその方向を向いた。ドラム缶が頭から湯気を噴き上げて怒っているのが見えた。

その大声で、ケースの中の少年がばち、と目を開いた。小さな指

で目元をこすり、顔を上げる。埋田はその少年と目が合った。少年は埋田を見上げると、につこりと笑った。とても可愛らしい顔をしている。

「いやいやいや、と埋田は頭をぶんぶんと左右に振った。そして、ケースにくつつく位に顔を近づけて中に居る少年を見つめた。その子は裸で、同じように銀色のトレーに入れられていた。少し大きめの物のようだ。同じようにプライスカードに値段が表示されていた。少年は首から売約済み、と書き込まれたプレートを下げていた。

「だから、ウチは最高級の肉を用意してあるんだよ、それを今更キヤンセルだなんていったいどういふつもりなんだい！ いい？ 最高級の、若い雄なんだ。手に入れるのだった一苦労だったんだからね！」

店主の女は電話の相手と何やら大声でやりあっていた。客は埋田一人だからいいようなものの、特にその気がなくても耳に入ってくる程の罵声だった。

「最高級の、若い雄、って……まさか」

埋田は目の前のケースの、少年を再び見つめた。少年はやはり眠いのか、もう一度トレーの上に丸くなって目を閉じていた。埋田の顔色がさあつと青くなった。

「どうしたんだい？ 買いたいものはもう決まったのかい」

埋田の傍に、いつのまにか通話を終えたらしい女が立っていた。

埋田はひつと息を飲んだ。ショーケースにべったりと両手を貼り付けたままの状態で固まっていた。

「ふうん」

女がにや、と笑っている。

「アンタ、その子が欲しいのかい？」

「い、いや、別にそういうわけじゃあ」

「いいいいいよ、持って帰んな！ 折角入荷したつてのに、相手方にキャンセルされちまってさあ」

女がいそいそとケースの後ろに回り込んだ。

「キャンセルって、ああ、あの電話。いやちよつと待ってって、色々

おかしいだろあんた！」

埋田は理解できずにそう訴えたが、女は気にも留めないようだ。ふん、と鼻息も荒く言い放った。

「あちしは縁起を担いでんだよ。返品された肉なんて置いとくのは真つ平だ。タダで、いややっぱ100グラム10円でアンタに譲ったげる」

「がめついな！って、……あ、あのさあ。あんた、まさかとは思うんだけど、……コイツは人間なんだよな？」

女は何を今更、とても言いたげな顔を向けた。

「で、要るの、要らないの？どっちなんだい」

ずい、と顔を近づけてくる。その女の有無を言わせぬ迫力に気圧されて、埋田は叫ぶように言った。

「あ、ああ買うよ、買います！おいくらですか！」

「そうかい」

女は身を引くと、嬉しそうに表情を歪めた。ガラツとケースを開け、中に居る少年をむんずと掴んで引きずり出した。目を開いた少年が眠たそうな顔を埋田に向けていた。女が少年を抱えると、はかりの上に乘せた。

「丸ごとじゃあ扱いにくいでしょ、ちょちよつと捌いたげようか？」

女が巨大な包丁を手に、そう問いかけてきた。埋田の脳内で血みどろのバラバラ死体と化した少年の映像が再生される。ぞくつとした。勘弁してくれと、大げさな身振り付きで訴えた。

「あー、あー！いいですつ、……そのっクリスマス近いし、丸焼きにしようかなーなんつて！」

「ふうん、まあいいけど」

埋田はふう、と胸を撫で下ろした。

支払いを終えると、持ち帰り用の油紙に一応包み込まれた少年を埋田は抱き取った。少年の体は外気で冷たく冷えている。埋田はぎゅうとその小さな体を抱きしめた。

そつえば、と振り返って見た。ショーケースに並んでいたロー

ストされた骨付き肉は、とても身近な存在と似ていることに気付いた。埋田の背中にぞわつと寒気が走った。ありえない話ではない。女が後方で、うふ、と嬉しそうな声を出した。

「また来て頂戴ね。お兄さん、結構あちしの好みのタイプ」

「あ、は、はい、また、じゃあっ」

埋田はもう後ろを確認することはなく、逃げるように店を飛び出した。自動ドアから外に出て、あの奇妙なBGMがすうと消えた。

「あれ……？」

急に、埋田の肩に押し掛かっていた重圧感が消えた気がした。何故だかわからないが、戻って来れた。そんな風に感じたのだった。腕の中では、無理やり押し付けられたあの少年がすやすやと眠っていた。埋田はごく、と喉を鳴らして、思い切って振り返って見た。

そこには、ぽっかりと空き地が広がっていた。あの奇妙なHELM EATの建物は、どこにもなかった。

お肉の名前

埋田は人目を避けるように物陰に移動した。その腕の中には先ほど購入したばかりの少年が眠っていた。服などは着ておらず、生肉を包む油紙を巻きつけただけの格好だ。日も暮れて、寒さが一段と増した街の中だった。

埋田は自分の着ていたジャケットを脱ぐと少年をそっと包み込むようにした。ひゅう、と冷たい風が吹き抜け、埋田は震え上がった。少年がすやすやと寝息を立てているのが僅かに聞こえてきた。

「さて、どうしたもんか……」

埋田は一人、そう声に出して呟いた。

警察に事情を話して、この子を引き取ってはもらえないかと考えた。勿論、人間を売買するなどあつてはならない話で、そうするべきだと。

しかし埋田ははたと思いとどまった。そのいう自分の身に降りかかったやつかいな事情を、上手く説明することが出来るだろうかと思つたのだ。

特に後ろめたいことなど何もなかったとしても、多くの人間がそうであるように埋田も警察の人間が苦手だった。必要以上に緊張するし、ぎこちない振る舞いにもなる。その上、今の埋田は思いつきり不審者以外の何者でもなかった。

埋田は自分が相談を受ける立場の人間だと仮定してみた。ある日の夕暮れ、裸の少年を抱き抱えた挙動不審な男がやってくる。男は妙な店で売りつけられたのだと言って、その少年の保護を求めている様子だ。どこでと尋ねれば、振り向いた時には影も形も無くなっていた、と答える。

——どうだろう。とりあえずは男を重要参考人としてその身柄を拘束するに違いない。幼児誘拐、または虐待、そして更に薬物中毒の疑いをかけて男を詮索するだろう。

勿論埋田の想像に過ぎないが、一昔前のギャグ漫画の警官になら即刻逮捕されかねない状況だった。無理だ。埋田は諦めた。自分もまた巻き込まれただけの被害者と言えるんじゃないかと開き直った。そうして黙って少年を連れて帰ることにした。寒かったせいでそういう決断をモはやく下したかったからに過ぎない。

幸い埋田は独り者で、迷惑を掛ける家族はいなかった。包み込まれた衣服の中で、息苦しいのか少年が身を擦らせ、頭を外気に晒すように出してきた。

髪の毛がぼさぼさになって乱れていた。きょとんとした顔で見上げてくる。やはりとても可愛らしい顔をした子どもだった。

「なあ、お前。なんであんなところで売られてたんだよ？」

埋田は訊いてみた。少年は答えず、ただじっと埋田を見つめている。もしかすると言葉を話すことが出来ない子どもなのかもしれない。

「お前、母ちゃんはとうしたんだ？父ちゃんは？」

少年はわからない、と言うように頭をぶんぶんと横に振った。埋田ははあとため息を吐いた。

埋田は、それが多少受け入れがたい理由ではあるとわかってはいるが、この少年は自分が対価を払って手に入れたものだと考えた。そんな軽々しい問題ではないが、少しくらいは所有権を主張したって構わないだろうと。それは食べるための取引であつたが、勿論埋田にはそんなことを実行に移す趣味は無かつた。それよりも一つ思いついたことがあつたのだ。

「ラン」

埋田は腕の中の少年にそう呼びかけた。少年が何事かといった顔を向けた。

「お前の名前だよ。いいだろ、俺は今日からお前のことランって呼ぶから」

少年はなにやら嬉しそうな顔をして笑った。意味を理解出来ていいのかいなのか、取りあえず不快な感情を持たれたわけではない

ようで、埋田はほつと息を吐いた。

マンションの自室に辿りつき、玄関を開けて中に入った。真つ暗な中電気のスイッチを入れた。

「ただいま」

埋田はそう、部屋の奥に向けて声を掛けた。

埋田の暮らしているマンションはまだ新しく、駅近くにあるということもあって人気の物件だった。埋田の借りている部屋だけが割安に設定されていた。それには少々訳があった。

しばらくして、玄関先に青白い顔をした男が現れた。男は埋田を出迎えに来たようだ。

（おかえり）

そう、ぼそつと呟いた。その男は、埋田の部屋の前の住人だった。憑島という男だ。死んでしまっただけからもお、この部屋に居座り続けている。そのせいでここは事故物件扱いになっていた。憑島はとくに住人に危害などを加えるわけではなかったし、埋田は気にしない性質だったのでどうでもよかった。

（ん？）

憑島は埋田が抱えているものを興味深そうに見つめた。埋田が抱えていた少年を床に降ろすと、明らかに動揺した様子で騒ぎ始めた。（どうしたんだ、その子ども！お前、まさか誘拐してきたのか？）「ちげーよ、俺がそんな奴じゃねーってくらいわかってるだろ。説明すつからちよつと待っててくれよ、腹減ってさあ」

憑島は納得がいかないようになにやらぶつぶつと言っていたが、大人しくリビングまで移動して行った。地縛霊の癖に、ずいぶんと感情表現の豊かな男なのだ。埋田は重さで痺れた腕を軽く振り、また再びランを抱え上げて自分もリビングに移動した。

ランの為にオレンジジュースを入れてやり、埋田はコーヒークップを2つテーブルの上に置いた。一つは憑島の為のものだ。飲めないのに自分の分が出されないと憑島は不機嫌になるのだ。そうして、捨ててしまうことにも文句を言うので埋田はいつでもコーヒ

ーは2杯飲む羽目にあっていた。

ランはストローが珍しいのか、夢中でオレンジジュースを掻き回していた。埋田がそつと口元にあてがい、ストローを口に含ませる。やがて口の中を満たした甘酸っぱい液体にランは大喜びで、ずるずると音をたてて啜り始めた。

（……で、どうしたんだ、こんな小さい子。お前の知り合いの子どもでも預かることになったのか？お前みたいな人間に頼むような不用心な人間が居るとは思えないが）

「うるせーよ。あー、もう、全部説明すつから」

埋田はこれまでにあった出来事を憑島に説明した。肉を買いに行った商店街で、奇妙な店を見つけたこと。その女店主から半ば無理やりこの少年を買い取らされたこと、そうしてその建物が何故か突然消えてしまったことなどを、事細かに話した。憑島はやはり信じられない話だと思っていたようだった。

憑島はそうでなくても頭の固い男なのだ。几帳面で、とても神経質なところもあった。埋田がうつかり消し忘れた部屋の灯りを注意したり、戸締りについても口うるさかった。助かるのだが、激しくウザかった。

（お前がここまで手の込んだ冗談を言うとも思えないが、本当のことだとしたらかなりやっかいだな）

「でもさ、俺だって被害者なんだ、そこところはわかってくれよ」

（で、どうするんだ？）

「どうって、何だよ」

（お前はこの子どもを丸焼きにして食べるつもりなのか？）

埋田は思わずコーヒーを吹き出した。

「食うわけねーだろ！常識的に考えろよ、どーいう方向に頭が固いんだよお前は！第一丸焼きだろうがなんだろうがこんなやせっぱちのどこに食える肉が付いてるんだよ」

埋田がそう叫ぶのを、隣でランが何やら申し訳なさそうな顔をして見上げていた。ランに聞かせるような話では無かったなと埋田は

反省した。

「ゴメンな」

食べる、と言ってからはたと気が付いた。埋田は御馳走どころか、今日の晩御飯すら買ってきていなかった。ランはと言えば、お腹が空いたと訴えるわけでもなく、また眠たそうに目元を擦り始めた。埋田は自分のシャツを引っ張り出して着替えさせ、自分のベッドに寝かせてやった。もう夜も遅い時間帯で、眠いのなら寝かせた方がいいかと思ったのだ。

埋田はそれから、冷蔵庫にある缶ビールを2本取り出してテーブルに置いた。一本は憑島の為の物だった。食べられるものがないかキッチンを探り、やきとりの缶詰を発見した。憑島は飲めもしないビールとつまみを前になにやら考え込んでいるようだった。

（なあ、この肉と、あの子のどこが違うんだ？）

憑島が妙な事を言った。

「ああ、何言ってるんだよ。全然違うだろ」

（お前は、食べ物としてあの子どもを買ってきたわけだろう？お前はやきとりに名前を付けて可愛がっているのとどこが違うっていうんだ？）

「うーん」

埋田はその冷たくて固い鳥肉を口の中に入れた。憑島が余計な事を言っただけで嫌な想像をしてしまった。

「お前って時々わけわからんこというのな」

埋田は完全に酔いが廻ってしまう前に、取りあえず明日の為に米を炊いておこうと炊飯器を洗った。いつも三合ほどまとめ炊きをすることにしている。適当に洗った米を入れ、目盛まで水を注ぎ込み、埋田はスイッチを入れた。それから憑島の分に出しておいた、温くなりかかったビールの缶を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9596y/>

据え膳！？

2011年11月29日13時55分発行